

Title	＜翻訳＞キケロー 『トピカ』
Author(s)	渡辺, 浩司
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 61 p.73-p.102
Issue Date	2021-03
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81513
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

キケロー『トピカ』

渡 辺 浩 司 訳

凡例

- 1 底本は以下の通りである。
Wilkins, A. S., *M. Tullii Ciceronis Rhetorica*, Tomus II, Oxford, 1903.
また以下の校訂・注釈書を参照した。
Reinhardt, T., ed., tr. intro. and comentary, *Marcus Tullius Cicero Topica*, Oxford, 2003.
- 2 ローマ数字は、Janus Gruter 版キケロー全集（1618 年）の区分を示す。アラビア数字は、Alexander Scot 版キケロー全集（1588 年-1589 年）の区別を示す。これらの区別は便宜的なものであり、内容上の区別と一致しない場合が多い。
- 3 固有名詞について、ギリシア人名の場合はギリシア語形、ローマ人名の場合はラテン語形で表記する。ph、tp、ch の音は、それぞれ p、t、k と同じ音とした。
- 4 () はギリシア語やラテン語の原文であり、[] は訳者が補った語句である。

I 1 親愛なるガイウス・トレバーティウスよ、私はこれまで以上に大きな主題について、しかもここ数年に出版した本¹⁾とくらべても価値ある主題について書くことに着手していました²⁾。しかし君の懇願がこの著述活動から私を引き戻してくれました。覚えていることと思いますが、トゥスкулムにある私の別荘で一緒に過ごし、お互いの興味の赴くままに図書館で書物を繙いていたとき、数巻にわたるアリストテレースの『トピカ』と呼ばれるも

1) 『トピカ』は、前 44 年 7 月 28 日にイタリア半島南端のレギウムの町から発送された。このときまでに、キケローは数々の著作を著している。前 45 年には、『慰め』、『アカデミカ』、『善と悪の究極について』、『神々の本性について』、『トゥスкулム荘対談集』が書かれ、前 44 年 7 月までには『大カトー・老年について』、『運命について』が書かれている。この箇所暗示されている著作は、『大カトー・老年について』と『運命について』のことだろう。

2) 『義務について』のことだと考えられる。この著作は前 44 年 11 月に公刊された。

のを君はたまたま見つけました。その書名に心引かれた君は即座にこの著作の内容を私に尋ねました。2 その著作には、われわれが方法論にしたがって間違えることなく議論を発想する仕方についてアリストテレスが案出した方法が書かれていると私は説明しました。すると君は、何事でもそうするように謙虚に、しかし意欲で燃えているのがすぐに分かる仕方で、その内容を教授するように私に懇願しました。しかし私としては、自分の労を惜しむというよりもむしろ君のためになると思って、君自身でこれらの著作を読むように、あるいは最も博識ある弁論術教師からその理論をすべて授けてもらうようにと君に言いました。聞けば、君はその両方を試みました。

3 しかしながら君は、この著作の不明瞭さゆえにこの著作を遠ざけました。しかも私が思うに、かの偉大なる弁論術教師は、アリストテレスのこの著作を知らないと返答してきたのです。ごく一部の哲学者をのぞいて大半の哲学者たちに知られていないあの哲学者を、弁論術教師が知らなくても私は驚きませんでした。アリストテレスを知らない哲学者たちはその怠慢を責められるべきです。というのも、かの哲学者によって語られ発見された事柄によってのみならず、かの哲学者の表現の信じられないくらいの豊かさと優美さによっても心うばわれるべきだからです。

4 君は先のことを再三私に要求しましたが、他方でその要求が私の重荷になることを君は恐れています。君のこうした態度が私には容易に分かりました。ですので、不法な目にあっていと法律の解釈者〔である君〕に思われないように、私は君の恩義に応えないわけにはいられませんでした。私と私の友人は君から頻繁に長い手紙をもらいましたが、このことを思うと、もし私が承諾しないならば、君に忘恩無礼と思われるのではないかと恐れたのです。ところで、君と一緒にいたとき私がどれほど忙しかったかは君が一番の証人です。5 しかし、私は国家にも友人にも必要とされず、内乱の国にとどまれば面目を失うことになるので——命を落とす危険がなければ国にとどまることもできたでしょう——、君と別れてからギリシアへ旅立ちウェリア³⁾に着き、君の家に行き、君の家族に会いました。そのとき私はあの負い目を思い出しました。いわば君の無言の懇願を拒む気持ちにはなれませんでした。そういうわけで、船上でもあり手元に書物を持ちあわせてもいけませんので記憶をたよりにこの手紙を書きあげ、旅の途中で君に送ることにしたのです。君が忘れることはないと思います。私が君の懇願に誠実に応えていることを示すことで、君にも私の仕事を記憶してもらいたいからです。さて、引き受けた仕事に話を移すときです⁴⁾。

3) 南イタリアの西海岸にある町。トレバーティウスの故里だと思われる。

4) ここまでが『トピカ』の序文である。この序文によれば、キケローの『トピカ』はアリストテレスの『トピカ』の解説書である。しかしキケローの『トピカ』はアリストテレスの『トピカ』とは似ても似つかぬものである。この矛盾は、キケローの『トピカ』に関する諸問題の中で最も有名な問題であり、最も難しい問題である。

II 6 議論の厳密な方法は二つの部門からなります。一つは発想(inveniendi)の部門であり、もう一つは判断(judicandi)の部門です。これら二つの部門を最初につくったのは、私と思うに、アリストテレースでした。ストア派は一方の部門だけを研究してきました。すなわち彼らは、デアレクティケー(διαλεκτική)と呼ばれる学問を用いて判断の仕方を入念に追究してきたのです。しかし彼らは、トピケー(τοπική)と呼ばれる発想論——これは判断の部門より有用であり、本来の順番からしても判断の部分よりも先に来るべきもののなのです——をまったく無視しました。7 両方ともにとっても役に立ちますし、時間があれば両方とも論究したいのですが、われわれとしては、先に来るべきものから始めることにしましょう。物事が隠れている場所を指摘し、そこに印をつけておけばそれを発見するのが容易になるように、もしわれわれがある論証を探したいと思うならば、その場所を知っておかなければなりません。論証が引き出されるいわば場所のことをアリストテレースは「トポス」⁵⁾と名づけました。8 したがって、トポスとは、論証の場所であり、論証とは、疑わしいことに確信をもたらす推論であると定義することができます。

ところで、諸々の論証が閉じこめられているさまざまなトポスのうち、あるトポスは議論の主題そのものの内あり、あるトポスは主題の外からもたらされます。主題そのものの内にあるトポスは、「全体から」、「部分から」、「意味から」、「問題となっている主題に何らかの仕方に関連する事柄から」です。主題の外からもたらされるトポスは、主題の中になく主題から遠く離れています。

9 定義が主題全体に適用されるとき、定義は、問題となっている主題の内にいわば隠蔽されているものを明らかにします。この論証の定型句⁶⁾はたとえば次のようなものです。「市民法は、同じ国家に属する人びとの財産所有権を守るために、市民の平等を確立したものである。しかるに、平等の知識は有益である。したがって、市民法を学ぶことは有益である。」

10 次に部分の列挙ですが、これは次のように行われます。「もし誰かある人が戸口調査によっても奴隷解放によっても遺言によっても自由人とみなされなかったならば、その人は自由人ではない。しかるに、この者はこれらの条件のどれひとつとして満たしていない。したがってこの者は自由人ではない。」

次に意味ですが、これは言葉の意味から論証が導き出される場合で、たとえば次のようになります。「もし法律が納税義務者は納税義務者の代表であると規定しているならば、金持ちが金持ちの代表であると規定していることになる。なぜならば、納税義務者(assiduus)という言葉は、ルーキウス・アエリウスが言うように、「お金を払う(aes do)」から派生したからだ。」

5) 「場所」はラテン語で「locus」、ギリシア語で「τόπος」のこと。以下、トポスと訳す。

6) 定型句については、66節も参照。

III 11 さらに論証は、問題となっている主題に何らかの仕方に関連する事柄からも導き出されます。しかしこの種の論証はさらにいくつかの下位に区分されます。すなわちわれわれは、あるものを「結合による」論証と呼び、あるものを「類による」論証と、あるものを「種による」論証と、あるものを「類似による」論証と、またあるものを「差異による」論証と、あるものを「対立による」論証と、あるものを「付加による」論証と、あるものを「先行する事柄による」論証と、あるものを「後続する事柄による」論証と、あるものを「矛盾する事柄による」論証と、あるものを「原因による」論証と、あるものを「結果による」論証と、あるものを「より大ないしより小さいし同等との比較による」論証と呼んでいます。

12 結合による論証は、同語根の言葉から導き出されます。同語根の言葉は、同一の語根からなり形を異にするものです。たとえば、「賢明な」「賢明に」「賢明」です。このような言葉の結合はシュズユギアー（συζυγία）と呼ばれています。そしてここから結合による論証がうまれます。「もし牧場が共有である（compascuus）ならば、共同に牧養すること（compascere）は正しい。」

13 類からは次のように導かれます。「すべての銀が妻に遺贈されたのならば、家にあった貨幣もすべて妻に遺贈されたはずである。というのも、種の名前が保持されているかぎり種は類から切り離されない。ところで貨幣は銀貨という名前を保持している。したがって、貨幣も遺贈されたように思われる。」

14 一つの類のうちの種——より明確にするためこれを部分と呼ぶ人もいます——からは次のように導き出されます。「ファビアが『一族の妻』（mater familias）になるという条件の下で財産が夫からファビアに遺贈されるのならば、彼女が夫の権力下に入らないかぎり、ファビアには何も支払われない。というのも『妻』は類であり、この類には二つの種があるからだ。一つは『一族の妻』であり、夫の権力下に入った女性であり⁷⁾、もう一つは単に『妻』（uxor）とみなされている女性である。ファビアは二つ目の種の『妻』であるので、ファビアには何も遺贈されなかったと思われる。」

15 類似からは次のようにです。「使用権を遺贈された邸宅が崩落したり壊れたりしても、相続人は建て直したり修繕したりする義務を負わない。奴隷の所有権を遺贈されその奴隷が死んだとしてもその奴隷の代わりを見つける義務を負わないのと同じだ。」

16 差異から。「もし夫が自分の所有するお金を妻に遺贈したとしても、債務金も遺贈したということにはならない。というのもお金が金庫にあるのか、会計帳簿で借金となっているのかで大いに異なるからだ。」

17 対立からは次のようなものです。「夫からすべての所有物の使用権を遺贈された妻は、

7) 底本はこの句を削除する。

貯蔵室にワインや油が残されていても、それらを自分のものだと考えてはいけない。遺贈されたのは使用であって、消費でないからだ。両者は互いに対立する⁸⁾。」

IV 18 付加から。「頭格喪失を受けなかった女性が遺言をつくるとしても、法務官の布告はその遺言書にしたがって財産を遺贈することを認めないように思われる。というのも、奴隷の遺言書や国外追放者の遺言書や子供の遺言書に関しては法務官の布告によって財産が遺贈されるということが付加されるからだ。」⁹⁾

19 先行する事柄、後続する事柄、矛盾する事柄からは、次のように導き出されます。先行する事柄から。「もし夫の瑕疵で離婚になったら、たとえ妻の方から離婚通知を出したとしても、何も〔妻の持参金を〕子供たちに残す必要はない。」

20 後続する事柄から。「もし女が、婚姻権なしに男と結婚し、その後離婚したのならば、生まれた子供たちは父親に従わなくてもよいので、持参金を子供たちのために残さなくてもよい。」

21 矛盾する事柄から。「もし家長が女奴隷の使用権を妻に遺贈し、但書きで息子を第二の相続者にしたならば、息子の死後も妻は使用権を失うことはない。というのも一度遺言によって贈与されたものは贈与された当人の同意なしに剥奪されることはないからだ。法律に則って受け取ることと意志に反して返還することとは矛盾するからだ。」

22 原因からは次のとおりです。「すべての人には、共有壁に対して直角になる壁を作る権利がある。その壁は窓や戸のないものでもよいし、窓や戸があるものでもよい。ところで、共有壁を取り壊すさいに生じた損害に対して賠償を約束した人は、窓や戸のある壁によって発生した損害に対しては賠償する義務を負わない。」損害が発生したのは、共有壁を壊した人の瑕疵によるのではなく、共有壁がなければ支えられないように建築されていた工事の瑕疵によるからです。

23 結果からは次のとおりです。「女性が夫の手権に入ったとき、女性の全財産は持参金の名の下に夫のものとなる。」

比較からは、次のようなものである場合は妥当です。より大きいものに妥当することはより小さいものに妥当します。「都市には境界が定められていないので¹⁰⁾、都市では水は阻止されてはならない。¹¹⁾」反対も同様です。より小さいものに妥当することはより大きいものに妥当します。同じ例を反対にして使うことができます。同等のものに妥当することは別の

8) 底本はこの一文を削除する。

9) この例の説明については、50 節を参照。

10) 「境界画定訴権」(action finium regundorum) は都市では認められていなかった。『学説彙纂』第 10 巻第 1 章第 4 法文 9 項を参照。

11) 「雨水阻止訴権」(actio aquae pluviae arcendae) は都市では認められていなかった。『学説彙纂』第 39 巻第 3 章第 1 法文 17 項を参照。

同等のものに妥当します。「農場の使用担保は二年間有効であるので、家についても同様のことが適用される。」しかし法律には家のことが言及されていません。家は、他のすべてのものと同様一年の使用とみなされているのです。同等の問題に対しては同等の権利を要求する公平さというものが有効なのです。

24 しかし外から持ち込まれる論証は概して権威に頼ります。それゆえギリシア人はこのような論証を非技術的 (*ἀτέχνης*)、すなわち、弁論家の技術に与らないものと呼んでいます。たとえば次のように返答する場合です。「プーブリウス・スカエウォラ¹²⁾は言う、家の範囲とは共有の堀を保護するために作った屋根が覆う範囲であり、屋根を作った者の家のなかにその屋根から雨水が落ちてくる範囲だけである、君にはこれが範囲と思われるだろう。」

25 これまで私が説明してきた諸トポスは、あらゆる論証に至る道を指し示すいわば原理でした。以上で充分でしょうか。というのも君は要点をつかむのが速くしかも多忙だからです。V しかし貪欲な人を学習という宴に招待しましたので、ここで君に不満足のまま退散していただくよりもむしろ、残り物がでるほどに楽しんでいただくことにしたいのです。26

そういうわけで、これまで示した諸トポスの一つひとつには下位区分がありますので、できる限り詳しく下位区分を探究することにしましょう。

さて最初に定義について述べましょう。定義とは定義されるものが何であることを説明する文章のことです。ところで定義には二種類あります。一つは存在するものの定義で、もう一つは心によって把握されるものの定義です。27 存在するものということで私が言おうとしているのは、見たり触れたりすることができるもののことです。たとえば、地所、家屋、壁、雨水、奴隷、家畜、食料貯蔵家具などです。君たち〔法律学者〕はときにこれらの種類を定義しなければなりません。他方で、存在しないものということで私が言おうとしているのは、触れたり指し示したりすることができず、心で認識したり把握したりすることができるものです。たとえば、所有権取得、後見、一族、父親側の血族関係を君が定義する場合です。こうしたものには物体がありませんが、心に残る明確な形象と理解があります。われわれはこれを概念と呼んでいます。論証においてこうした概念は明確に定義される必要がしばしば出てきます。

28 第二に、定義のうちのあるものは列举から成り、あるものは分割から成ります。列举からなるのは、問題となっている事柄がいわば四肢に分けられる場合で、たとえば市民法を定義して、元老院の布告、判決、法律家の権威、監督官の命令、習慣、平等からなると言う場合です。他方で、分割による定義は、定義される類の下位にあるすべての種を、次のように包含することになります。すなわち、「市民法に則った財産譲渡」は、財産〔手中物〕に

12) 権威の例としては申し分ない最も有名な法律家。

関する譲渡であって、それは、握取行為¹³⁾であるかあるいは法廷譲与であり、市民法にしたがって人々の間で行われることができる。

VI さらにこの他にも別の種類の定義がありますが、そうした定義はこの本の目的と関係しません。定義の方法とは何かを説明するだけにとどめましょう。29 昔の人たちは次のように教えます。定義しようとするものとそれ以外のことの共通点を選び出すとき、他のことに一切を移すことができない固有の特質が明るみに出されるまで追求するようにと。たとえば次のようなものです。「遺産は財産である」。これは共通の質です。というのも財産にもいろいろな種類があるからです。次のことをつけ加えましょう。「ある人が死んだとき他の人のものとなる」。これはまだ定義ではありません。死者の財産は、相続でなくてもいろいろな形で所有されるからです。一言つけ加えましょう。「法律に則って」。これで事態は、他の事柄から区別されたように思われます。すなわち、定義は次のように表されるでしょう。「遺産は、法律に則って、ある人が死んだとき他の人のものとなる財産である」。これでもまだ不十分です。次のことをつけ加えましょう。「遺言書によって遺贈されたわけでもなく、所有によって保持していたわけでもないもの」。これで完成です。次の例も同様です。「同族人」は、「同じ名前を持つ人たち」です。これでは不十分です。「自由人から生まれた子孫」。これでもまだ不十分です。「祖先に奴隷がいない」。まだ何か足りません。「公民権を剥奪されたことがない」。これでほとんど十分です。教皇のスカエウォラ¹⁴⁾がこの定義に何も付け足さなかったのを私は見たからです。このやり方は、存在するものを定義しなければならないにせよ、心によって把握されるものを定義しなければならないにせよ、どちらの定義においても有効です。

30 列挙と分割とがどのようなものかを説明しました。しかし二つが互いにどう異なるのか簡潔に述べなければなりません。列挙にはいわゆる四肢があります。たとえば体の頭部、肩、手、横腹、下腿、足などです。VII 分割には、種があります。これをギリシア人はエイデー(εἶδη)と呼んでいますが、われわれ[ローマ人]の著作家たちは、このことを話題にするとき種(species)と呼んでいます。この訳語は悪くはないですが、格変化させて話すときは不便です¹⁵⁾。というのも、ラテン語で specierum [species の複数属格] とか speciebus [species の複数与格ないし奪格] とか言うことができるとしても、私は specierum や speciebus と言いたくありません。それでもしばしばこれらの格を用いなければなりません。私は、formis [forma の複数与格ないし奪格] や formarum [forma の複数属格] の方を好

13) 「traditio nexu」は、mancipatio（握取行為）と同じ意味で使われている。握取行為についてはガーイウス『法学提要』（1, 119）を参照。

14) クイントゥス・ムーキウス・スカエウォラ。前95年の執政官。教皇にして法律家。キケローは彼の生徒だった。『弁論家について』第1巻180節を参照。

15) クインティリアヌス『弁論家の教育』第1巻6章26節を参照。

みます。どちらの言葉 [species も forma] も同じことを意味しているので、話すときの便利さを無視すべきではないと思います。

31 類と種とは次のように定義されます。類とは、多くの異なったものに適用される概念であり、種とは、その差異が類の始原、いわば源に関係づけられうる概念のことです。ギリシア人たちがエンノイア (ἐννοια) とかプロレープシス (πρόληψις) とかと呼んでいる概念のことを私は言っているのです。これは、われわれの中に植えつけられていて、あらかじめ獲得されているのですが、それを認識するには分節化されることが必要です¹⁶⁾。種は類があまりことなく分割された当のものです。たとえば法を法律と慣習と平等に分割した場合です。もし種が部分と同じものだと考えているならば、その人は技法を取り違えていて、たまさかの類似に混乱させられ、本来区別されなければならないものを十分明確に区別していないのです。

32 さらに、弁論家と詩人は、ある種の甘美さを持つ類似性からヒントを貰い、隠喩的に定義しました。しかし私としては、必要ならば話は別ですが、君の例 [法律上の例] を離れて他の例を用いることはしません。さて、君たち法律家が公共のものだと主張する海岸について問題が生じて¹⁷⁾、この問題に関わる人々が、私の同僚であり友人であるアクウイーリウス¹⁸⁾に対して海岸とは何かと尋ねたとき、アクウイーリウスは「波が戯れる場所」と定義するのが常でした。これは、いわば青春を「年齢の花」と定義し、老年を「人生の落日」と定義しようとするようなものです。というのも、隠喩を用いることで事柄に固有の言葉と自身の仕事とを放棄したからです。定義に関しては以上です。他の点を見ていくことにしましょう。

VIII 33 どの部分も取り残さないようにするためには、ときに列挙を用いなければなりません。後見人を列挙しようとして、知らずしてあるものを見落とすかのようなことをするかもしれません。しかしもし契約ないし裁判の規則を列挙しようとするならば、このような無限の領域において何かを取り残すことは欠点となりません。しかし同じことが分割では欠点となります。というのも、一つの類に属する種の数を決まっているからです。しかし部分への分割は、泉からいくつもの川が分かれるように、しばしば際限のないものとなります。

34 したがって弁論術の教科書において、問題という類に議論が及ぶとき、すぐに、その種

16) エンノイアとプロレープシスとはストア派の術語である。エンノイアは「観念」であり、それは生後自然本性的に、非人工的に形成される。プロレープシスとは、7歳までに獲得されると言われる「先取観念」のことである。『初期ストア派断片集』2.83を参照。

17) 海岸は公共のものであるが、海岸に建っている建物は私有であった。海岸に建物を建設するには許可が必要だった。

18) ガーイウス・アクウイーリウス・ガッルス。クウイントゥス・スカエオオラ・ポンティフィクスの弟子で、著名な法律家。前66年にはケケローとともに法務官を務めた。

がどれくらいあるのかということが正確に述べられるのです。しかし言葉と思想を飾る装飾、すなわちいわゆるスケーマタ〔文彩〕(σχήματα) について話が及ぶときは、同じようにいきません。この主題には際限がないからです。このことから、列挙と分割の違いということでは私が言いたいことは分かるでしょう。言葉はほとんど同じことを意味しているのですが、意味される物事が異なるので、物事の名前が違うことを彼ら〔われわれの祖先〕は望んだのです。

35 多くの論証が意味からも導かれます。これは、論証が言葉の意味から引き出されるときに用いられるものです。ギリシア人はこれをエテュモロギアー (ἐτυμολογία) と呼びました。すなわち、字義通りに訳せば〔ラテン語の〕原義 (veriloquium) です。しかしわれわれはあまり適切でない新しい言葉を避けて、この種のことを語源と呼びます。言葉は物事の印 (rerum notae) だからです。したがってアリストテレースが、同じことをシュンボロン (σύμβολον) 〔印〕と呼んでいます。これは、ラテン語の印 (nota) のことです。しかし意味されていることが明白なとき、名称についてあまり心碎くべきではありません。36 議論の多くが、語源の分析によって引き出されます。たとえば、「帰郷権」とは何かが問題となっているときです。——どんなことが「帰郷権」なのかということを行っているわけではありません。というのも、これは次のように分割に関わるからです。「帰郷権によって帰郷するのは次のものである。人、船、荷籠用のラバ、雄馬、手綱になれた雌馬。」——そうではなくて、「帰郷権」(postliminium) 自体の意味が問題とされ、言葉そのものが語源的に説明されるときです。これについて私の友人セルウィウスは、「後の」(post) 以外は語源から説明されないと考え、liminium は語の延長だと主張します。finitimus 〔隣人〕、legitimus 〔法の〕、aeditimus 〔神殿の番人〕のように語末の timus は、meditullium 〔中央〕の tullium と同じく、意味がないというわけです。37 しかし、プーブリウスの息子スカエウォラ¹⁹⁾はこの語を、post 〔後〕と limen 〔入口〕からなる合成語と考えます。敵のものとなり、われわれの手から離れ、いわば入口から出ていったものが、後 (post) に同じ入口 (limen) から戻ってくるとき、postliminium によって戻ってきたように思われるからです。マンキヌスの裁判さえこの種〔の論証〕によって、すなわち、彼は postliminium によって帰還したのであって、収容されなかったのだから降服したのではないと弁護できます。降服も贈物も受納がなければ意味がないというわけです。

IX 38 次に続くのは、当面の問題に密接に関連する事柄からなるトポスです。これはいくつかの部分に分割されると先に述べました²⁰⁾。それらの諸部分のうち第一のトポスは、ギリシア人がシュジュギアー (συζυγία) と呼んでいる「結合による」もので、これは、先

19) クイントゥス・ムーキウス・スカエウォラ。29 節の注を参照。

20) 11 節を参照。

ほど論じた²¹⁾語源とはほぼ同種のものです。たとえば、豪雨で雨水が集まるのをわれわれは見るがこの水のことだけを雨水 (aqua pluvia) と理解するとき、ムーキウスならば、「雨」 (pluvia) も「雨が降ることによる」 (pluendo) も同語源の言葉である以上、雨が降ることによって生じる水はすべて阻止しなければならないと言うでしょう²²⁾。

39 しかし、論証が類から導き出されるとしても、始原にまでさかのぼって論証を導き出す必要はありません。〔論証のための〕前提とされる類は証明されることよりも一般的であればよく、より低次の類から論証を導き出すこともしばしば許されているからです。たとえば、「雨水」は、究極の類としては「空から降って生じた水」です。しかしより低次の類としては——そしていわば雨水阻止訴権がこれに基づくのですが——、「有害な水」です。「雨水」という類の種が「土地のせいでは有害な水」と「人のせいでは有害な水」です。これらのうち一方は裁定人が阻止するよう命じますが、他方は命じません。

40 類から導き出されるこの論証はまた、次のように全体から部分を追究するとき、容易に成しとげられます。すなわち、もしある行為がなされ、別の行為が偽装されて、悪質な詐欺²³⁾が生じた場合、まず、悪質な詐欺の事例を枚举し、次に、悪質な詐術だと君が主張する偽装行為が今枚举された悪質な詐欺の事例に入ることを示せばよいのです。この種の論証は最も強力なものと思われています。

X 41 次にくるのは類似です。これはいろいろなことに関わりますが、君たち〔法律家〕にとってよりもむしろ弁論家と哲学者にとって関心のある事柄です。というのも、すべてのトポスはあらゆる種類の議論に論証を提供しますが、それでもある種の議論にはより広くトポスが適用され、ある種の議論には限定的に適用されます。それゆえわれわれは、論証の種類を知る必要があります。しかし、いつこれらを用いるかについては、問題となる事柄自体が君に教えてくれることでしょう²⁴⁾。42 たとえば、多くの対比²⁵⁾によって望むべき立証を達成する「類似による論証」があります。それは次のようなものです。「もし後見人が約束を守らなければならないならば、もし仲間が、もし信託を託す人が、もし信託を託された人がそうしなければならないならば、財産管理人もそうしなければなりません。」多くの比較

21) 35 節を参照。

22) ある種の状況においては、「雨水阻止訴権」 (action aquae pluviae arcendae) にしたがって、自分の土地から他人の土地に雨水が流れることを防がなければならなかった。「低地に位置する土地の所有者は、高地に位置する土地の所有者を相手方として、後者が人工的工事 (opus manu factum) により雨水の自然な流れに変更をもたらしたとき、雨水阻止訴権により訴えることができる。」ゲオルク・クリンゲンベルク『ローマ物権法講義』(瀧澤栄治訳) 大学教育出版、2007 年、41 頁。『学説彙纂』(第 39 巻第 3 章第 1 法文序 ウルピアヌス「告示註解」第 53 巻) をも参照。

23) 「悪質な詐欺」についてキケローは『義務について』第 3 巻 60-61 でも言及している。

24) キケロー『弁論家について』第 2 巻 175 を参照。

25) 「対比」については、43 節を参照。

から望むべき立証を達成するこのやり方は、帰納的論証と呼ばれます。ギリシア語ではエバゴーゲー（ἐπαγωγή）と呼ばれています。ソークラテースが議論のなかでこれをしばしば用いています。43 対比によって、もう一つ別の「類似による論証」が得られます。それは一つのことをもう一つのことと対比する、あるいは等しいことを等しいことと対比するときです。都市において境界が問題になっていても、境界は都市よりも田舎の問題であると思われるので、君は境界を画定すべく仲裁人に助けを求めることができますが、これと同じように、都市において雨水が損害を与えていても、雨水を阻止するために仲裁人に助けを求めることはできないでしょう²⁶⁾。44 例示も「類似による論証」という同じトポスに入ります。たとえば、クラッスス²⁷⁾はクリウスの訴訟において、「もし十ヶ月以内に息子が生まれ、成人に達する前に死んだ場合には、次の者が遺産を獲得することにする」と遺言状に書かれていたが、相続人になったかもしれない人たちの名前をたくさん例として示したのです²⁸⁾。こうした例示は効果的であり、君もしばしば法律上の助言をするときに利用しているものです。

45 さらに仮定的な例示も効力があります。しかしこれは君たち法律家というよりも弁論家の領域でしょう。もっとも君たちもしばしば利用していますが、そのやり方は次のようなものです。ある人が、握取行為によっては譲渡できない物を握取行為により譲渡したと想定しなさい。では、その物は、受け取った人の財産に本当になるのでしょうか。それとも譲渡した人が、何らかの点でこのことに責任を負うことになるのでしょうか。[類似による論証のうち] この種の議論においては、もの言わぬものに語らせたり、死者を黄泉から呼び出したり、物事を誇張しあるいは矮小するために不可能なこと——これはヒュペルボレー（ὕπερβολή）²⁹⁾と呼ばれています——や驚くべきことを語ったりすることが弁論家や哲学者には許されています。しかしこれらの領域は、[法律という君の分野の領域よりも] 広いものです。とはいえ、先の述べたように³⁰⁾、どんなに大きな問題でもどんなに小さな問題でも論証が導き出されるのは同じトポスからなのです。

26) 「境界画定訴権」については23節を、「雨水阻止訴権」については39節を参照。

27) ルーキウス・リキニウス・クラッススは、キケロー『弁論家について』の主要な登場人物。

28) クリウスの訴訟については、キケロー『弁論家について』第1巻180、『ブルートゥス』194-198を参照。ある人物が、自分の死後に息子が生まれると思って、その息子を相続人とする遺言を残して死んだ。その遺言には「十ヶ月以内に息子が生まれ、成人に達する前に死んだ場合には、[クリウスを] 第二の相続人とする」と記されてあった。実際には息子は生まれず、クリウスが相続人となるはずであったが、親族のコポーニウスが、「息子が生まれて、成人に達する前に死んだ場合には」という条件を満たしていないので、相続権はクリウスではなく、コポーニウスにあると主張し訴訟をおこした。クラッススはクリウス側にたち、クイントゥス・ムーキウス・スカエウォラはコポーニウス側にたった。クリウスとコポーニウスについては不詳である。

29) ヒュペルボレーはギリシア語で誇張法のこと。アリストテレス『弁論術』第3巻11章15-16節、デメトリオス『文体論』124節を参照。デメトリオスは、類似性による誇張法、優位性による誇張法、不可能性による誇張法の三種類を挙げている。

30) 41節を参照。

XI 46 類似のあとに続くのは、これとはまったく対照的な差異です。しかし非類似と類似とを見分けるのは同じことです。この種の例は次のようなものです。ある女性から借りたお金を、その女性の後見人の承諾を得ずにその女性に返すことは正当であるとしても³¹⁾、後見人に保護されている未成年の男子ないし女子から借りたお金を、同じようにして返すことは正当であるわけではない。

47 次のトポスは、「対立から」と呼ばれているものです。対立からの論証には多くの種類があります。それらのうち、同じ類に属すが互いに大いに異なるものがあります。たとえば英知と愚鈍です。ところで、あることが述べられ、それといわば正反対のことが思い浮かぶとき、それら二つは同じ類に属すと言われます。たとえば、早さに対する遅さがそうです。早さに対する弱さはそうではありません。こうした対立からの論証には次のようなものがあります。「愚鈍から逃れたいのならば英知を求め、悪意から逃れたいのならば善意を求めることにしよう。」同じ類に属するものの互いに対立するこれらの項は、「異なったもの」と呼ばれています。48 というのも、他にも、われわれがラテン語で「欠如」と呼び、ギリシア人が「ステレーティカ (στερητικά)」と呼んでいる対立があるからです。すなわち、「非」(in)という接頭辞は、もし「非」という接頭辞がなければ持つであろう力を言葉から奪うことになります。たとえば、面目と不面目、人道と非人道、その他これに類することです。これらの取り扱い方は、先に³²⁾私が「異なったもの」と述べたものと同じです。

49 対立したことどもの種類はまだ他にもあります。たとえば、二重と一重、多いと少ない、長いと短い、より大きいとより小さいのように、他のものと関係づけられると組になるものです³³⁾。また、否定と呼ばれる強い対立もあります。ギリシア語でアポパティカ (ἀποφατικά)、すなわち、主張する人たちへの対立です。もしこれがそうであれば、あれはそうでない。例を必要とするでしょうか。論証を考えると、あらゆる対立するものにはぴったりと対立するものがあるというわけではないということを理解しておくだけで十分なのです。

50 ところで少し前に³⁴⁾、付加からの論証の例を挙げましたが、それは、もし遺言作成の権利を持たない人によって作成した遺言に書かれた通りに法務官の布告に基づいて財産の遺贈が認められるならば、多くの付加を受け入れなければならないということでした。しかし、何

31) 結婚した女性は夫の手権 (in manu) の下に入る場合と、自分の父親の家父権 (in patria potestate) の下にとどまる場合があった。家父権下にとどまる女性は、父親が死ぬと自権者 (sui juris) [家長権に服していない者] となった。しかし自権者となった女性も後継者の後見におかれ、法的な取引にさいして後見者の承諾を必要とした。ただし返済金を受け取ることはこのかぎりではなかった。ガーイウス『法学提要』第2巻85を参照。

32) 47節を参照。

33) 関係についてはアリストテレース『範疇論』7章 (6a36-b1) を参照。

34) 18節。

であるか〔現在〕、何が起きたのか〔過去〕、何が起こるのだろうか〔未来〕、そもそも何が起こりうるのか〔可能性〕ということが問題にされるとき、このトポスは、法廷で取り扱われる推測の問題に対してきわめて有効です。XII 51 さて、このトポスの形式は以上のようなものです。しかしまた、このトポスは、当該事件の前に何が起きたのか、当該事件と同時に何が起きたのか、当該事件の後に何が起きたのかということを調べるようにと忠告しています。事実がどうなっているのが問題となる件を誰かある人がガッルスに持ち出すと、われわれの友人であるガッルスは、「これは法律の問題でなく、キケローの問題だ」としばしば述べていました。しかしながら君は、私の技法に属するトポスを一つとして省略することを許してくれないでしょう。もし自分に関係ないことは何も記されなくてよいと君が考えているならば、君はあまりに利己的だと思われることになるでしょうから。要するにこのトポスは、大部分は弁論家のものであって、法律家にのみならず哲学者にさえも関わりのないものなのです³⁵⁾。52 すなわち、たとえば、当該事件の前の出来事として問題となるのは、準備、会談、場所、約束、宴会です。当該事件と同時のこととは、足音、人々の叫び声³⁶⁾、人影、そしてこれらに類することです。当該事件の後のこととは、蒼白い顔、赤面、ふらつき、もし他にも心の動揺と罪の意識の印があるならば、〔それらのことどもです。〕さらに、消された火、血のついた剣、その他何かが行われたと疑念を抱かせうる事柄です。

53 次に、論理学者たちに固有のトポスは、「後続する事柄から」、「先行する事柄から」、「矛盾する事柄から」です。「付随する事柄」については先に述べましたが³⁷⁾、これは必ずしもいつも生じるわけではありませんが、「後続する事柄」は必ず生じます。「後続する事柄」ということで私が言っているのは、何事かの後に必ず続いて起こることのことです。そして同じことが「先行する事柄」と「矛盾する事柄」についてもあてはまります。というのも、何事かの後に起こることはすべて、何事かと必然的に関連しているからです。そして、〔互いに〕矛盾する事柄は〔互いに〕関連することができないようなものなのです。XIII したがって、このトポスは三つの部分、すなわち「後続すること」「先行すること」「矛盾すること」に分かれますが、論証の発想の点ではこのトポスは一つであり、論証の扱い方の点では三つなのです。すなわち、遺産として銀をすべて遺贈された女性は貨幣も遺贈されるべきであると仮定するとき、「もし貨幣が銀であるならば、貨幣は女性に遺贈される。しかるに貨幣は銀である。したがって貨幣は遺贈される。」というふうに論証を導くのと、「もし貨幣が遺贈されないならば、貨幣は銀でない。しかるに貨幣は銀である。それゆえ貨幣は遺贈される。」と

35) 2節においてアリストテレース『トピカ』の説明を弁論術教師 (rhetor) に求めていることから分かるように、キケローは、一般に、『トピカ』が弁論術の理論だとみなしている。『弁論家』46節を参照。

36) 底本はこの一句を削除する。

37) どこを指しているのか不明。

いうふうに論証を導くのと、「銀が遺贈され、貨幣が遺贈されないということはない。しかるに銀は遺贈される。したがって貨幣も遺贈される。」というふうに論証を導くのとでは、どんな違いがあるのでしょうか。54 ところで論理学者たちは、論証のこの推論を、すなわち、前提を仮定してそれと関連づけられたものが後に続く場合の推論を、推論の第一の形式と呼んでいます³⁸⁾。また、[ある前提を仮定してそれと] 関連づけられたものを否定し、その結果関連づけられたものもの[前提]をも否定する場合の推論を、推論の第二の形式と呼んでいます。さらに、諸事項が関連づけられることを否定し、次に諸事項のうちの一つないしそれ以上の項を認め、その結果として、諸事項のうちの残りの項を排除する場合の推論を、推論の第三の形式と呼んでいます。55 ここから、対立による推論というあの弁論家たちの推論が生じます。もっとも彼ら自身はこれをエンテューメーマタ (ἐνθυμήματα) と呼んでいます。すべての推論がエンテューメーマ (ἐνθυμήμα) と呼ばれるのは適切でないという理由からではありません。ギリシア人の間ではホメロスがその卓越性ゆえに、ホメロスという言葉が詩人を意味する共通の名詞となりましたが³⁹⁾、これと同じように、すべて推論がエンテューメーマと呼ばれるのですが、対立に基づく推論が最も鋭い考えと思われたので、対立に基づく推論だけが共通の名詞であるエンテューメーマという名前をもらったのです。この種の推論は以下のようなものです。

これを恐れて、あれを恐れぬとは⁴⁰⁾。

非のないと思っている女性を非難し、まったく正当だと思う女性を罰しようとするのか。

あなたの知っていることは役に立たず、知らないことが害になるというのか⁴¹⁾。

XIV 56 この種の議論は、確かに、君たちが法律上の見解を述べるときの議論に関係しますが、しかしむしろ哲学者のものなのです。哲学者は弁論家と、矛盾する前提からなる推論を共有していますが、この推論は論理学者によっては第三の様式と呼ばれ、弁論術家によっ

38) キケローはこの54節で証明不可能の推論の三つの形式を問題にしている。これについてはすでに19節でもキケローは述べている。三つの形式を形式論理学で表すと次のようになる。第一の形式は、If p , then q ; p ; so q . (もし P ならば、 Q である。 P である。ゆえに Q である。) 第二の形式は、If p , then q ; not q ; so not- p . (もし P ならば Q である。 Q でない。ゆえに P でない。) 第三の形式は、Not (p and q); p ; so not- q . ((P かつ Q)でない。 P である。ゆえに Q でない。) これらの推論形式は、アリストテレスの『トピカ』における推論というよりはむしろストア派の論理学に由来するものであると考えられる。セクストゥス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』第2巻157節から158節を参照。

39) 古代ギリシアで詩人といえばホメロスのことをさす。

40) 悲劇作品からの引用。『アッティクス宛書簡集』14. 21. 3にも同じ文句が引用されている。

41) 悲劇作品からの引用。『弁論家』166節にも同じ文句が引用されている。

てはエンテューメーマと呼ばれています。論理学者によって用いられる様式が他にもいくつかあります。それは矛盾対立するものからなります。すなわち、「これか、あれかである。しかるに、これである。したがって、あれではない。」同様に、「これか、あれかである。しかるに、これでない。したがって、あれである。」これらの推論が妥当なのは、矛盾対立するもののうちに正しいものが一つしかありえないからです。57 論理学者は、これらの推論のうち前者を第四の様式と呼び、後者を第五の様式と呼んでいます。さらに論理学者は、[命題のこうした] 関係の否定 [の様式] をつけ加えています。すなわち、「これとあれとが両方ともにあることはない。しかるに、これである。それゆえ、あれではない。」これが第六の様式です。そして第七の様式は、「これとあれとが両方ともにあることはない。しかるに、これではない。ゆえに、あれである」です。これらの様式から無数の推論がうまれます。そしてほとんどの弁証法がこれらから成ります。しかし、以上説明してきたこと⁴²⁾は、この書の目的には必要ありません。

58 次にくるのは、作用することに関するトポスで、これは「原因」と呼ばれていますが、それともう一つ、「作用する原因によって作用を受けること」に関するトポスです。これらの例は、他のトポスと同じく、少し前に、しかも市民法から引用しましたが⁴³⁾、これらはもっとさまざまな領域で利用されます。

XV 原因の種類は二つです。一つは、それ自体の力によって、その力に属する結果を確実に引き起こすものであり、たとえば、「火が燃やす」です。もう一つは、結果を引き起こす性質を持っていないが、それなくしては結果すら生じないものです。たとえば、銅像は銅がなければ作れないので、銅像の原因は銅であると主張しようとする場合です。59 それなくしては何も結果を生まないというこの種の原因のうちあるものは、静的で、活動的でなく、何かしら不活発なものです。たとえば、場所、時間、材料、道具、そしてその他これらに類することです。しかしあるものは、結果を生むためのいわゆる準備を提供するもので、それ自体で補助となるものを持っているものです。もっともこの補助は必ずしも必要というわけではないのですが。たとえば、出会いは恋の原因となり、恋は不品行の原因となります。永遠に続く原因のこうした連鎖からストア派の運命論が作られるのです。

さらに、それなくしては何も結果を生まないという原因の種類を私が「二つに」分けたように、結果を引き起こす原因もまた「二つに」分けることができます。すなわち、これらの原因のうちあるものは、何ら補助なしに結果を明白に生み出すもので、またあるものは、補助を必要とするものです。たとえば、知恵はそれだけで補助なしに人を賢くしますが、知恵がそれだけで補助なしに人を幸福にするかどうかは疑問です。60 それゆえ、必然的に何ら

42) 第四から第七までの推論の様式のこと。

43) 22 節から 23 節。

かの結果をうみ出す原因が議論のさいに見い出されたとき、その原因によって結果が生じるということを疑いなく推論することが許されます。XVI しかし結果をうみ出す必然が原因のうちにないような原因の場合には、必然的な推論は行われません。さらに、結果を生み出す必然的な力を持つ原因の種類は、たいていの場合は間違いに至ることがありませんが、それなくしては何も結果しないという種類の原因はしばしば混乱に至ります。たとえば、両親なくして息子はないとしても、だからといって、誕生の必然的な原因が両親にあったというわけではありません。

61 したがって、それなくしては何もないという原因と、それから確かに何かが起こるといふ原因とを区別しなければなりません。すなわち、前者は次のようなものです。

ペーリオンの森にいなかったら⁴⁴⁾

樅の幹が大地に倒れなかったら、かの有名なアルゴ船は造られなかったでしょう。しかし樅の幹には何かを引き起こす必然的な力はありません。しかしながら、アイアースの船に波打つ炎の雷が落ちたので、アイアースの船は必然的に燃え上がりました。

62 さらに原因の区別が他にもあります⁴⁵⁾。欲望、意志、考えがないにもかかわらず、いわば作品というものを生み出す原因があります。たとえば、生成するものは必ず消滅する、というものです。また、意志、激情、性格、本性、技術、偶然によって結果を引き起こす原因もあります。たとえば、意志によるものは、君がこの本を読む場合であり、激情によるものは、現状からの結果を人が恐れる場合であり、性格によるものは、簡単にすぐ怒る人のごときであり、本性によるものは、不品行が日ごとに増す場合であり、技術によるものは、上手に絵を描く場合であり、偶然によるものは、好天に恵まれた航海をする場合です。こうしたことのどれも原因なしには起こりません。さらにいえば原因なしにはそもそも何も生じないのです。しかしこの種の原因は必要不可欠なものではありません。

63 しかしすべての原因を調べてみると、ある原因には「いつも同じ結果を生み出すという」不変性があり、ある原因には不変性がないということに気づきます。本性と技術には不変性がありますが、他のものにはありません。XVII しかし不変性のない原因のうち、あるものははっきりと見て取れますが、あるものは隠れています。欲望や判断に関わる原因ははっきりと見て取れます。しかし運に左右されるものは隠れています。というのも、原因なしには何も起こらない以上、不明瞭な原因によって気がつかぬうちに出来事が結果すること

44) エンニウス『メデシア』「断片」

45) 哲学的な原因の区別から、弁論に役立つ区別へと話題が移る。

こそ運というものだからです⁴⁶⁾。さらに、出来事は、一部は意図せずして、一部は意図してのことです。意図せずしての出来事は、必然的に結果することです。意図しての出来事は、熟慮によるものです。64 運による出来事は意図によるか意図によらないかなのです⁴⁷⁾。たとえば、武器を捨てるのは意図に属しますが、ぶつかろうと思っていた人にもぶつかることは運に属します。ここから、君たちの訴訟手続きにおけるあの有名な「身代わりに雄羊を差しだす」⁴⁸⁾がうまれたのです。もし武器を投げたというよりもむしろ手から落としたというのならば「雄羊を差しだすべし」。さらに無知や無思慮の中には激情もあります。激情は意図的なものですが——激情は叱責や諫言によって静まるからです——、意図的なことがときに必然と思え、意図せずと思えるほどの大きな力を持っているのです。

65 原因のトポス全体を説明しました。このトポスのいろいろな種類から、少なくとも弁論家や哲学者の重要な議論に、豊富な論証が提供されます。しかし君たち法律家にはそれほど多くの論証を提供しないかもしれません。しかしその論証はおそらく正確なものです。というのも、最も重要な事柄についての私的な裁判は、法律家の知恵にかかっているように私には思われるからです。というのも法律家はしばしば「法廷に」出席し、助言を求められ、法律家の知恵に救いを求める注意深い弁護人たちに武器を提供するからです。66 したがって、「誠意をもって」という言葉が「定型句に」が添えられるすべての裁判や、「誠実な人たちの間では誠実に振る舞うべし」という句が添えられるすべての裁判においては、とりわけ「よりよく、より平等に」という句が添えられる離婚時の持参金争いの仲裁においては、法律家は心づもりをしていなければならないのです。詐欺、誠実、平等を教えてくれるのは法律家です。また友には友が、仕事を引き受ける者が仕事をたくした者に、指揮官と部下の互いが互いに、妻が夫に、夫が妻にどんな義務を負うべきかを教えてくれたのも法律家です。したがって、論証のトポスを熱心に研究したあかつきには、弁論家や哲学者のみならず法律家も、自分たちの問題について豊かに論じることができるでしょう。

XVIII 67 この原因のトポスと密接に結びついているのが、原因から結果するトポスです。原因が結果を示すように、結果は何が原因かを示します。このトポスは、弁論家や詩人に対して、ときに哲学者に対しても、しかしまた修辞をこらして滔々と語ることのできる人々に対しても、これこれのことから何が生じるのかを彼らが述べるとき、驚くほど豊かな言論を提供するのが常です。原因を知ることは結果を知ることでもあるのです。

68 残りは、比較のトポスです。このトポスの性質と例は、他のものとともに、先に示し

46) 底本に従わず、Reinhardtに従う。ここでの「運」の理解はストア派のものである。

47) 底本はこの一文を削除する。

48) 「十二表法」には、意図せずして人を殺した場合には、殺害者が身代わりに雄羊を差しだすべしとする付則があった（「十二表法」Ⅷ、3 (Crawford)）。

ました⁴⁹⁾。そういうわけでその取り扱い方を説明しなければなりません。さて、比較されるのは、より大きいとか、より小さいとか、等しいとかと言われるものです。そしてこうした比較によって次のことが吟味されます。すなわち、数、種、価値、さらに他のものとの関係です。

69 数の点では次のように比較されます。すなわち、より多くの善がより少ない善に優先され、より少ない悪がより多い悪に優先され、より長く持続する善がより短い善に優先され、遠く広く行きわたるものが限られた範囲にしか行きわたらないものに優先されます。というのも、前者からより多くの善が生まれ、より多くの人々がそれをまねし実践するからです。

種の点では次のように比較されます。まさにそのこと自体のために求められるものは、何か他のもののために求められるものよりも優先され、生まれながら備わっているものは、外から付け加わったものよりも優先され、純一なものは混ぜ合わされたものよりも、楽しいことはそれほど楽しくないことよりも、栄えあることは役に立つことよりも、容易なことは困難なことよりも、必要なことは不必要なことよりも、自分のものは他人のものよりも、珍しいものはありふれたものよりも、ほしいものはなしですまして困らないものよりも、完全なものは不完全なものよりも、全体は部分よりも、理性を用いた振る舞いは理性を欠いた振る舞いよりも、自発的なことは無理矢理のことよりも、魂あるものは魂なきものよりも、自然なことは自然でないことよりも、技巧をこらしたものは技巧をこらしていないものよりも優先されます。

70 比較において価値が決定されるのは次のようにしてです。結果を生み出す原因は結果を生み出さない原因よりも重要であり、それ自体で充足しているものは他の助けを必要とするものよりも望ましいものであり、われわれの力でできることは他の人々の力でできることよりも、安定しているものは不安定なものよりも、取り去ることのできないものは取り去ることのできるものよりも望ましいものなのです。

他のものへの関係は、次のようなものです。指導者たちの利益は他の人々の利益よりも大きい。より快適なこと、大多数の人々によって認められていること、最善の人々によって賞賛されていることも同様です。

71 等しいことを比較するさいには、優れているとか劣っているとかいうことはありません。釣り合いがとれているからです。しかしまさにこの等しさのゆえに、比較されるものはたくさんあります。この比較はたいてい次のように導かれます。もし助言によって市民たちを支援することと援助によって市民たちを支援することとが等しく賞賛されるべきであるならば、[法律家として法律上の問題について] 助言する人たちと [弁論家として法廷で] 弁

49) 23 節を参照。

護する人たちも等しく名誉に浴さなければならない。ところでこの議論の第一の命題は妥当します。したがって、第二の命題も妥当するのです。

論証を発想するさいの規則は以上ですべて説明しました。定義、列举、語源、結合、類、種、類似、差異、対立、付加、後続する事柄、先行する事柄、矛盾、原因、結果、より大きいものやより小さいものや等しいものの比較。以上から君が出発したのならば、他に探すべき論証のトポスはありません。

XIX 72 さて、あるトポスは議論されている当の主題に内在していると言い——これらについては十分に論じました——、別のトポスは外から加えられたと、最初に二つを区別しました⁵⁰⁾。後者について少し論じたいと思います。もっともこれは、君たち[法律について]の議論には関係ないのですが。さて、始めた以上は、内容全体を明らかにするようにしましょう。というのも君は、市民法以外のことには関心がないような人ではないからです。しかも、この手紙は君に宛てて書いているのですが、他の人たちの手に渡ってもいいように書いています。名誉ある研究に関心を持つ人たちにできるだけ役に立つように努力することにしましょう。

73 さて、この論証は、技術が関与しないとされていますが⁵¹⁾、証拠に左右されます。証拠とは、さしあたって、信頼を得るために[議論の]外側から集めてきたことすべてと定義しましょう。ところで、どんな人物でも証人にふさわしいというわけではありません。信頼を得るためには権威が必要とされますが、この権威を生み出すのは証人となる人物の素性あるいは周囲の状況です。証人となる人物の素性からうまれる権威は徳と大いに関連しますが、周囲の状況には権威を生み出すものがたくさんあります。たとえば、才能、財産、年齢、好運、技術、経験、必然、ときには偶然の巡り合わせがそうです。というのも、才能ある人、財産のある人、人生の荒波に鍛えられた人が、信頼に値すると思われるからです。これは正しくないかもしれませんが、民衆の意見を変えることはほとんど不可能であり、判決を下す人たちも意見を述べる人たちも民衆の意見にすべてを合わせているのです。実際、私が上に述べた事柄において卓越している人たちは、徳そのものにおいても卓越していると思われるのです。

74 しかし、私が今列举したことのうち残りのもの[技術、経験、必然、偶然の巡り合わせ]にはいかなる種類の徳也没有。しかし技術を用いるか——説得するための術の力は大きいからです——、経験に頼るかすると、信頼(fides)を獲得するときがあります。というのもたいてい経験豊富な人たちが信用されるからです。XX 必然もまた、肉体から生じたり、心から生じたりする場合には、信頼を勝ち得ます。鞭、拷問台、火で拷問された

50) 8 節を参照。

51) 24 節を参照。

人たちが語る言葉は、まさに本当のことを語っているのだと思われるからです。また、悲嘆、情欲、憤怒、恐怖という心の激情は、必然の力を持っています。こうした激情にかられて人が語る言葉は説得力があり、信頼を勝ち得ます。

75 偶然に真実が発見される場合もこの種のものに属しています。たとえば子供であること、睡眠、軽率、酩酊、錯乱です。すなわち、小さい子供はしばしば重要な事実を口にしますが、その意味することを知らないのです。また睡眠、酩酊、錯乱の故にしばしば多くのことが暴露されました。さらに軽率さ故に多くに人々が惨憺たる目にあってきました。たとえば最近ではスタイエヌスに起きたことです。彼は、善良な市民が壁に隠れて盗み聞きしているのに、あることを言ってしまう、その発言が公になり、法廷に持ち込まれ死刑を宣告されたのです。スパルタのパウサニースについてもこれと似たような話をわれわれは聞いています⁵²⁾。

76 さて、偶然の巡り合わせとは、たとえば、秘密にしておかなければならないことが語られたりなされたりして、偶然にも事態が明らかになる場合です。パラメデーヌスに向けられた多くの証拠もこの種のものです⁵³⁾。この種の証拠は、真実でさえ反駁することができないときがあります。世論もこの種の証拠に入ります。世論はいわば、大多数の人々の証言なのです。

ところで、徳によって信頼を勝ち得る証拠には二種類あります。一つは本性によって効果を発揮し、もう一つは勤勉によって効果を発揮します。神々の徳が卓越しているのは本性により、人間たちの徳が卓越しているのは勤勉によるのです。77 神々による証拠は次のようなものです。第一に、言葉です。これは、神々の言葉が含まれているというまさにこのこと故に神託と呼ばれています。次に、神々の働きが認められる出来事です。そのうちまず、世界そのもの、そして世界の秩序全体と美しさが挙げられます。次に挙げられるのは、鳥が空を飛ぶさま、鳥の鳴き声、さらに、天空での雷鳴と閃光、地上での多くの出来事に見られる前兆、内蔵による未来の予知です。多くのことが、睡眠中の夢によっても明らかにされます。信頼を得るために神々による証拠がしばしば引かれるのは、以上のトボスからです。

78 人間の場合には、有徳という評判が最も有効です。この評判は、本当に徳を持っている人が徳を持っているのだという評判でもあります。徳を持っているように見える人が徳を持っているのだという評判でもあります。したがって、才能、勤勉、教養を備えていると思われる人、カトーやラエリウスやスキープオーやその他大勢の人たちのように、その生き

52) トゥーキューディデース『歴史』第1巻131-2あるいは133-135を参照。

53) パラメデーヌスは、トロイア戦争におけるギリシア側の武将。オデュッセウスに並ぶ知恵者。トロイア戦争中、オデュッセウスに状況証拠を捏造され、トロイア側との密通を疑われ死刑となった。ウェルギリウス『アエネーイス』2歌81-85行を参照。

方が堅実で賞賛されるべきだとされる人々は、周り人たちからそうなりたいたいと思われる人々なのです。さらに、国政に携わり世間の名誉に浴す人のみならず、弁論家や哲学者や詩人や歴史家もまた——信頼を得るために彼らの言葉や著作にしばしば権威を求めようとします——、世間の人たちからそうなりたいたいと評価される人々なのです。

XXI 79 さて、論証のトポスはすべて説明しましたので、ここで心にとめておくべき点を挙げておきます。すなわち、これらのトポスが一つとして認められないような議論はないということ、すべてのトポスがどんな問題にも適応されるわけではないこと、ある種の問題にはある種のトポスがより適切であり、また別種の問題には別種のトポスがより適切であるということです。問題には二種類あります。一つは、限定されていないもので、もう一つは限定されたものです。限定されたものは、ギリシア人たちがヒュポテシス（ὑπόθεσις）と呼び、われわれが個別案件（causa）と呼ぶものです。限定されていないものは、ギリシア人たちがテシス（θέσις）と呼び、われわれが一般論題（propositum）と呼ぶものです。80 個別案件は、ある特定の人物、場所、時間、行為、事柄によって、しかもこれらすべてに基づいて、あるいはこれらの大部分に基づいて決定されます。他方で、一般論題は、これらの一つないしいくつかに基づいて決定されますが、最も重要なことに基づいているわけではありません。したがって一般論題は個別案件の一部です。しかし他面では、すべての問題が、個別案件を構成する諸々の事柄——その一つにせよ、大部分にせよ、すべてにせよ——に関わります。

81 ところで、あらゆる事柄に関する問題〔一般論題〕には二つの種類があります。一つは認識〔理論的なもの〕に関わり、もう一つは行為〔実践的なもの〕に関わります。82 認識に関わる問題は、知識の獲得を目的とするものです。たとえば、法律は自然にうまれたのか、それとも、人々のいわば協定と契約によってうまれたのかということが問題となっている場合です。行為に関わる問題の例は次のようなものです。賢者は国事に携わるべきかどうか。認識に関わる問題は、「あったのかどうか」、「何であるか」、「どのようなものか」という三つの部分からなります。これらのうち第一のものは推測によって、第二のものは定義によって、第三のものは正不正の区別によって説明されます。

推測の方法は、四つに分かれます。一つは、事柄が「あったのかどうか」ということです。もう一つは、それが「どこから由来したのか」ということです。第三は、「どんな原因がそれを引き起こしたのか」ということです。第四は、「事態の変化」が問題になるときです。「あったのかどうか」は次のようなものです。名誉なるものがそもそも存在するのか、平等というものがそもそも存在するのか。それともこれらは人々の評価の中にしかないのか。「どこから由来したのか」は次のようなものです。徳は本性によって作られうるのか、教育によって作られうるのか。結果をうみ出す原因については次のように問われます。雄弁は何によって

うみ出されるのか。変化については次のようにです。話し上手[雄弁]は何らかの変化によって話し下手に転化しうるのか。

XXII 83 さて「何であるか」が問われるとき、概念、属性、分割、列挙を説明しなければなりません。というのもこれらは、定義に属するものだからです。ギリシア人がカラクテル (χαρακτήρ) と呼んでいる記述もこれに加えられます。概念は次のように問われます。「権力を持てば持つほどその者にとってますます有益になることは、そもそも正義なのか。」属性については次のように問われます。「嘆き悲しむのは人間だけかそれとも動物もか。」分割と列挙とは同じ仕方です。次のように問われます。「善には三種類あるのか。」記述は次のようなものです。「どのような人が惨めなのか、どのような人がおべっか使いなのか。」その他、人柄や暮らしぶりを示す同じような表現です。

84 さて「どのようなものか」が問われるときには、単純に問われるか、比較によって問われるかです。単純に。「栄光は希求されるべきか。」比較によって。「栄光は富よりも高く評価されるべきか。」単純な問いには三種類の問いがあります。すなわち、希求すべきことと忌避すべきことについて、公平と不公平について、名誉と恥についてです。比較による問いには二種類の問いがあります。すなわち、同一と相違について、より大きいとより小さいについてです。希求すべきことと忌避すべきことについては、次のようになります。「富が望ましいのならば、貧困は忌避すべきことである。」公平と不公平については次のようになります。「君に不正をはたらいた人ならば誰であれその人に仕返しをすることは公平か」。名誉と恥については次のようになります。「国のために死ぬことは名誉か」。85 ところで、もう一方の問い[比較による問い]は、二種類あるのですが、一つは、同一と相違についてであって、たとえば、「友人とおべっか使いとは、王と独裁者と何が違うのか」です。もう一つは、より大きいとより小さいについてであり、たとえば、「雄弁と市民法の知識とではどちらにいったい価値があるのか」と問う場合です。認識に関わる問題については以上です。

86 残りは、行為に関わるもの[一般論題]です。これには二種類あります。一つは、義務に関わるもので、もう一つは、感情を喚起すること、沈静化すること、完全に除去することに関わります。義務に関わるものは、たとえば、養子をもらうべきかと問われるときです。感情に関するものは、国家を護るようにと激励すること、賞賛や名誉へと激励することです。この種のものには、不平不満、煽動、哀れみをさそう言葉があります。さらに、ときにこの種のものには、怒りを静める言葉、恐怖心を取り除く言葉、歓喜雀躍を抑制する言葉、悲嘆を取り去る言葉が入ります。これらは一般論題における種類ですが、同時に個別案件にも転用されます。

XXIII 87 さて次に、それぞれの問題に対してどんなトポスが適用されるべきかを考察しなければなりません。実際のところ、すべてのトポスは一つ以上の問題に適用されるので

すが、私が述べたように⁵⁴⁾、それぞれの問題にはふさわしいトポスがあるのです。すなわち、推測に最もふさわしいのは、原因から引き出されうる論証、結果から引き出されうる論証、結合から引き出されうる論証です。定義に関係するのは、定義する学的方法です。この最後の種に一番近いのは、「同一と相違から」と呼ばれていると述べたものです。それは、いわば定義の一種なのです。強情と不屈が同じなのかということが問題になる場合、それは定義によって判断されるべきだからです。⁸⁸ この種の問題には、「後続する事柄から」「先行する事柄から」「矛盾する事柄から」というトポスがふさわしく、さらに、「原因」や「結果」から引き出されるものも、これらに加えるべきでしょう。

(1) 仮に A が B の後に起きるとしよう。

しかるに A が C の後に起きない。

【したがって、B は C と同じでない。】⁵⁵⁾

(2) 仮に A が B の前に起きるとしよう。

しかるに A が C の前に起きない。

【したがって、B は C と同じでない。】

(3) 仮に A が B と矛盾するとする。

しかるに A が C と矛盾することはない。

【したがって、B は C と同じでない。】

(4) 仮に A が B の原因であるとする。

しかるに C には B 以外の原因がある。

【したがって、A は C と同じでない。】

(5) 仮に A が B の結果であるとする。

しかるに C は B 以外のものの結果である。

【したがって、A は C と同じでない。】

これら〔五つの〕のどれからでも、問題となっていることが〔他のことと〕同じなのか違うのかを確定することができるのです。

⁸⁹ 事柄は「どのようなものか」が問われる第三番目の種類の問題に関しては⁵⁶⁾、比較に役立つものがありますが、少し前に比較のトポスのところで例を挙げて説明しました⁵⁷⁾。希求すべきことと忌避すべきことについて問われる種類の問題のためには、心、体、外的条件の益不益を利用します。名誉と恥について問われるときも⁵⁸⁾同様に、弁論全体は心の善し

54) 79 節を参照。

55) 【 】は訳者が補った結論である。

56) 84 節。

57) 68 節以下。

58) 84 節を参照。

悪しに向けられるべきです。90 しかし、公平、不公平が論じられるときは、平等のトポスが集められることになるでしょう⁵⁹⁾。平等のトポスは、自然と慣習の二つに分けられます。自然には二つあります。自分のものを自分のものにする権利と復讐する権利です。平等の慣習には三つあります。一つは法律に関するもの、もう一つは協定に関するもので、三番目は古くからの慣習によって確立されたものです。そして平等には三つあるとされています。一つは神々に関するもの、一つは死者の魂に関するもの、一つは人間に関するものです。第一は敬虔と、第二は神聖、第三は正義ないし平等と呼ばれています⁶⁰⁾。XXIV 一般論題については以上で充分です。次に個別案件について述べなければなりません、これは少して充分でしょう。というのも、一般論題と共通する点が多いからです。

91 したがって⁶¹⁾、個別案件には三つの種類があります。法廷のもの、審議のもの、賞賛のものです。これら三つの目的それぞれが、どのトポスを用いるべきかを示してくれます。法廷の目的は法です。法廷 (judicium) という言葉は法という言葉 (jus) に由来します。法の部分は、平等の部分とともにすでに説明しました⁶²⁾。審議の目的は利益です。利益の部分はたった今説明したところです⁶³⁾。賞賛の目的は名誉です。名誉についてもまた先に論じました⁶⁴⁾。92 しかし個別案件はそれぞれにいわば固有のトポスから組み立てられています。...⁶⁵⁾それらは非難と弁護に分けられます。これらのうちには三つの種類があります。非難する人は罪を犯したと人を非難します。弁護する人は三つの点のうちどれか一つの点から異議を唱えます。三つの点とは、すなわち、実際には罪が犯されなかった、あるいは、罪が犯されたとしてもそれは別の罪名である、あるいは、合法的だ、というものです。最初の「否定の」とか「推測の」とかと呼ばれています。もう一つのは「定義の」とばれています。三番目のは「法廷の」とばれています——この名前はしっくりしないのですが——。XXV これらの個別案件にふさわしい論証は、これまでに述べてきたトポスからも手に入れますが、弁論術の教科書の中で解説されています⁶⁶⁾。93 ところで非難に対する反論は罪の否定を含みますが、これは、ギリシア語でスタシス (στάσις) と呼ばれているので、ラテン語でスタトゥス (status) と呼ばれています。それは、いわば反駁するためにとくくみあいになるときに、まずもって弁護がよって立つ場所だからです。審議においても賞賛に

59)「平等のトポス」についての説明は『トピカ』のここまでの箇所にはない。『弁論術の分析』131を参照。

60)「平等に三つある」ことが二度にわたり説明されている。底本は二度目の説明を不要としている。

61) 底本は「したがって」を削除する。

62) 90節を参照。

63) 89節を参照。

64) 89節を参照。

65) 欠損がある。Hubbellは「個別案件の第一は法廷の案件であり」という訳を提案している。

66) キケロー『発想論』第2巻の中で説明されている。

おいても同じスタトゥスがあります。というのも、弁論家が自分の意見として将来起こるであろうと述べたことは、まったく起こる可能性のない場合、あるいはほとんど起こる可能性のない場合、起こるわけがないとしばしば否定されるからです。この論証には推測のスタトゥスがあります。94 あるいは、利益、名誉、平等について、そしてこれらとは反対のことどもについて議論されるときには、法ないし名前のスタトゥスに出くわします。というのも、賞賛されていることは実際には行われなかったのだとか、あるいはまた、賞賛する人が与えた賞賛の名前は適切でないとか、あるいはまた、道徳的にも法律的にも不適切に行われたことなので賞賛に値しないとか、と否定されることがあるからです。これらの種類すべてをカエサルは、私の『カトー』に反対するときに、厚かましくも多用しました⁶⁷⁾。

95 ところで、スタトゥスから生じた論争のことを、ギリシア人たちはクリノメノン(κρινόμενον)と呼びましたが、君宛てに書いているわけですから、「争点」と呼ぶ方が私にはよいと思われます。この「争点」を支える議論は「支持内容(continentia)⁶⁸⁾」と呼ばれています。それはいわば、弁護の礎であって、もしこれが取り去られるならば、弁護もなくなるでしょう。

しかし、議論の余地がある論争を調停するには法律よりも確かなものはありませんので、法律を援助者ないし証人として召喚するように気を配らなければなりません。この点で、もう一つ別の、いわば新しいスタトゥスがありますが、ここではそれを法律の争点と呼ぶことにします。96 たとえば、反対者が主張しているようには法律は書かれていず、法律に書かれているのは別のことだと弁護側が主張するときがあります。こうしたことが生じるのは、法律の言葉が曖昧なので二通りの異なった意味⁶⁹⁾で受け取ることができるからです。あるときには、書き手の意図と文言が対立することがあります。そのときには、重視すべきは文言なのか意図なのか問題になります⁷⁰⁾。またあるときには、法律と矛盾する別の法律が持ち出されることがあります。このように、あらゆる文書に関して、論争を引き起こしうるものは三種類あります。すなわち、曖昧さ、言葉と意図の不一致、文書間の矛盾です。XXVI

法律においてのみならず、遺書や契約においても、また文書に基づいて執り行われるその他のことにおいても、これと同じ論争が生じることは、もはや明らかです。これらの扱いは他の諸著作のなかで説明されています⁷¹⁾。

67) カエサル『反カトー論』(散逸)のこと。

68) 裁判において、何について判決を求めるのかということ。

69) ギリシア語の「アンビボリア(ἀμφιβολία)」。キケロー『発想論』第2巻116-21、クインティリアヌス『弁論家の教育』第7巻9章を参照。

70) ギリシア語の「言葉と考え(ῥητὸν καὶ διάνοια)」。キケロー『発想論』第2巻122-43、クインティリアヌス『弁論家の教育』第3巻6章61節を参照。

71) キケロー『発想論』第2巻116-54を参照。

97 演説全体のみならず演説の各部分もこれらのトポスによって支えられます。これらのトポスのうちあるものは部分に固有のものです、あるものはすべての部分に共通するものです。たとえば序においては、序という部分に固有のトポスによって、聞き手の好意を引き出したり、聞き手を教化したり、聞き手の注意を引いたりします。同じように陳述も固有の目的を目指します。すなわち、陳述の部分が平明であるように、簡潔にあるように、明快であるように、信頼に値するように、適切であるように、威厳を持つように目指すのです。これらの性質は弁論全体になくしてはならないものですが、とりわけ陳述に特徴的な性質です。

98 陳述に続く部分は立証です。立証は説得によってもたらされますから、説得するために最も効力のあるトポスは何なのかについては、弁論術全体について論じた本の中で説明されました⁷²⁾。しかし結論の部分もまた別の固有のトポスを、とりわけ拡大〔というトポス〕を持っています。この拡大の効果は、聞き手の心をかき乱し沈め、そしてもし聞き手の心がすでにそのような状態になっているのならば、さらに聞き手の心を高めなだめる点にあります。

99 同情、怒り、憎しみ、嫉妬、その他の感情を引き起こすこの部分についての規則は、他の本で提供します。もし君が望むならば将来私と一緒にその本を読むこともできるでしょう。しかし君が欲していると思われることに関していえば、君の要求は十二分に満たされたはずです。100 論証を見つける方法に関係するものなら一つも見落とすことがないように、君の要求以上のことをしました。善良な商人がしばしば行うようなことをしたのです。善良な商人は、「鉱石や木材⁷³⁾」の所有権を保持していますが、家や土地〔という売却対象〕を売るとき、飾りとして適切に設置されているように見える〔売却対象外の〕ものを買い手に譲渡するのです。このように、いわば握取行為によって君に与えなければならなかったものだけでなく、私の義務ではないが飾りも譲与したいと思ったのです。

【刊本・注釈書・訳書】

Hubbell, H., *M. Tulli Cicero De inventione, De optimo genere oratorum, Topica*, London and Cambridge, Mass., 1949.

Borneque, H., *Cicéro Divisions de l'art oratoire, Topiques*, Paris, 1960.

Bayer, K., *M. Tullius Cicero Topica*, München, 1993.

吉原達也訳、「キケロ『トピカ』」、『広島法学』第32巻2号（2010）、92-66。

ガイウス『法学提要』佐藤篤志監訳 教文堂、2002年。

72) キケローのこの表現は曖昧である。どの著作を指しているのかははっきりしない。

73) 「鉱石と木材 (ruta et caesa)」。「掘り起こされ切り落とされたもの。家財道具。」『羅和辞典』田中秀央編、研究社、1966、549頁。地所を売るとき、売却の対象とはならなかった。

【論文】

Huby, P. M., 'Cicero's Topics and its Peripatetic Sources', in W. W. Fortenbaugh and P. Steinmetz eds., *Cicero's Knowledge of the Peripatos*, New Brunswick 1989, 61-76.

吉原達也、「キケロー『トピカ』におけるローマ法学の範例 (exempla)」、『広島法学』第25巻2号(2001)、257-263。

吉原達也、「キケロー『トピカ』とローマ法学(1)」、『広島法学』第26巻2号(2002)、1-20。

吉原達也、「キケロー『トピカ』とローマ法学(2)」、『広島法学』第26巻3号(2003)、33-53。

訳者後記

キケローの『トピカ』という短い著作である。キケローはこれを船上で記した。経緯については『トピカ』の序文に詳しく書かれている。南イタリアのウェリアから船に乗り、メッシーナ海峡のイタリアの町レギウムに到着するまでの間に『トピカ』を書いた。キケローは、レギウムの町から『トピカ』をトレバーティウスへ送っている。『トピカ』と一緒に同封したと考えられている手紙が残っている。長くなるが以下に引く。

キケローよりトレバティウスへ

いいかね、君が私にどれほど重んじられているか、分かってくれないと むろん、私は愛情で君にまさっているのではないのだから、当然なのだが、それでも。君の目の前では拒絶に等しい言い方をしたし、確かに気にかけていなかったのだが、君と離ればなれになっているうちに、負い目を背負ったままではいられなくなった。それで、ウェリアを船で離れるやいなや、アリストテレスの『トピカ』の執筆に取りかかった。君にはこんなに大きな愛情を注いでいるこの町が、みずから私にそう勧めたからだ。本はレギウムから君宛に送った。主題の許すかぎり、できるだけ平明に書いたつもりだ。もし君にどこか分かりにくく思われるのなら、どんな学問でも、読むだけで指導者も多少の訓練もないとなると、理解はとうてい覚束ない、という事実を思い起こしてもらわねばならない。何も他処に尋ねることもない。君たちの市民法にしても、書物だけで理解が可能だろうか。確かにできる人間は大勢いるけれども、やはり教師と経験を必要とすることに変わりはない。でも、君の場合、注意深く読むなら、また、幾度も繰り返し読めば、独力ですみずみまで把握し、正しく理解できるだろう。けれども、その君でも、提題がなされた際にすぐにトポスが思い浮かぶだけの力を獲得できるよう、訓練を重ねたまえ。私は無事に帰国でき、そちらの状況が無事息災であると分かったら、君をその訓練でしごいてあげるつもりだ。

〔紀元前44年〕七月二八日 レギウムにて^{注)}

『トピカ』は、アリストテレスの『トポス論』の解説書だとキケローは言う。二つの著作は内容的に全く異なるのだけれども、目的は同じである。すなわち前者においては「方法論にしたがって間違えることなく議論を発想する仕方」(Cic. *Top.* 5)を見つけることであり、後者においては「議論するさいに矛盾することを言わないように、あらゆる問題に対して常識に基づいて推論する方法論を見つけること」(Aristoteles *Top.* 100a18-20)である。弁論術は、議論で相手を打ち負かし煙に巻くことを目的とするのではなく、矛盾することなく議

注) キケロー『縁者・友人宛書簡集』334 (7・19) (兼利琢也訳、『キケロー選集 16』172-3頁)。

論を展開するにはどうしたらいいのかを目的にしていたのである。

この拙訳は、10 年以上前の翻訳原稿に手を入れたものである。その間に吉原達也先生が翻訳を発表された(吉原達也訳、キケロー『トピカ』、『広島法学』第 32 号(2010)、92-66)。拙訳を発表する意義はなくなったと考えたが、ファクトチェックとかポストトゥルースと言われる時代になり、あらためて古代の弁論術書に意見を聞く価値が出てきたのかと思い直した。とはいえ、キケローが船上でおそらく数日で書いたものを翻訳するのに 10 年以上かかったことになる。

nescire quid ante quam natus sis acciderit, id est semper esse puerum. Cicero

あなたが生まれる以前に何が起きたのかを知らない、それはあなたがいつまでも子供であるということです。キケロー

Cicero's *Topica*

translated by Koji WATANABE

Cicero's *Topica* is one of the canonical works on the Roman rhetorical theory. In this work Cicero said that he explained what was written in Aristotle's *Topica*. Although Cicero's *Topica* had almost nothing in common with Aristotle's, the aim of both *Topica* was to expound the way how one might discover arguments without any error methodologically. Cicero's work was written on a sea voyage from Velia to Rhegium without any reference books. The sources of this work are thought to be outside Aristotle's *Topica*, but inside Cicero's rhetorical theory, especially de *inventione* and *partitiones oratoriae*. Cicero's *Topica* is, therefore, one of the best texts that tells us Cicero's thought on rhetoric